

伝え合う力をはぐくむ総合的な学習の時間の在り方

鹿島市立七浦小学校 教諭 高稲 久美子

太良町立大浦中学校 教諭 古賀 恭子

1 研究の趣旨

現代の社会は、国際化、情報化などの様々な面で日々大きく変化している。子どもを取り巻く状況を見ると、テレビゲーム、携帯電話、電子メールなどの普及や家族間での対話の減少、地域や子どもたち同士の人間関係の希薄化などにより、他人との直接コミュニケーションの機会が少なくなっていると言える。最近の子どもにかかわる事件では、自分の気持ちをうまく伝えられないために、問題を解決できず、問題行動につながる事例も見られる。このような現状においては、直接人とコミュニケーションをとり、豊かな人間関係を築くことのできる社会性をもった児童生徒の育成が望まれている。

総合的な学習の時間においては、「自己の生き方を考えることができるようにすること」がねらいとされている。そのねらいに近付くためには、児童生徒が自然や社会、人とのかかわる体験を通して、自己を発見し、自己の生き方について考えていく学習が必要であると言える。また、児童生徒が社会や人と豊かなかかわりをもつためには、互いの立場や考えを尊重しながら適切に表現したり、正確に理解したりするだけでなく、かかわりを通して互いのよさを認め、高め合えるような伝え合う力を育てることも重要となる。

そこで、本グループでは「伝え合う力」を「互いの立場や考えを尊重しながらコミュニケーションを図ることのできる力」ととらえ、総合的な学習の時間において、コミュニケーションへの意欲や態度をはぐくむことを研究のねらいとした。また、多様な価値観をもつ人々の考えや生き方に触れさせることで、現在や将来においての自己の生き方への考えを深めさせていくことにした。

2 研究教科・領域等

総合的な学習の時間（小学校英語活動、中学校）において、研究課題の解決に向けて研究を行った。

3 研究の成果

(1) 学習活動における手立て

本グループでは、「伝え合う力」をはぐくむために、まず、いろいろな相手とかかわる場を設定し、相手と積極的に伝え合おうとする意欲を喚起するような活動を仕組んだ。伝え合いの中では、楽しさや喜びを味わわせたり、考えを深めさせたりするような工夫をした。また、発達段階に応じて児童生徒に伝え合い方を考えさせるようにした。

小学校では、ALTとのかかわり、友達とのかかわりの場を多く設定し、聞くことに重点を置いたタスクベースの活動を取り入れた。言葉が完全には分からない相手であっても、「相手とかかわりたい」、「相手の言葉を聞きたい」という思いをもつような活動を通して、積極的にコミュニケーションをとろうとする意欲をはぐくんでいきたいと考えた。

中学校では、人とのかかわる体験的な学習を仕組み、伝え合うことや人とのかかわることのよさを実感できるような単元作りを行った。そして、伝え合う場において、相手を意識した伝え合い方を考えさせるとともに、いろいろな見方・考え方に気付きがもてるような指導の在り方を工夫することにした。そうすることで、生徒の伝え合おうとする意欲や態度をはぐくみ、自己の生き方への考えを深めさせることができると考えた。

このような考えに基づいて、単元作りの際に、どのような点に留意して工夫していけばよいかに
ついて考えた。工夫の観点と、小学校・中学校の学習活動における手立てをまとめたのが表 1 であ
る。

表 1 伝え合う力を高めるための工夫

工夫の観点	小学校	中学校
伝え合いへの 意欲を喚起する 工夫	○ 児童が「聞きたい」「やってみたい」 という思いをもつような、聞く必然性 のある内容を盛り込んだタスクベース の活動を設定する。	○ 地域の職場を体験する学習を通して、 いろいろな生き方（価値観）に出会わ せ、伝え合いたい内容をもたせる。
伝え合いの楽 しさを実感させ たり、考えを深 めさせたりする 工夫	○ 友達と協力し、楽しみながら活動さ せたり、ALT とのやりとりを通して 親近感をもたせたりする。 ○ 異文化に触れる活動を通して、人や 文化についての気付きを深めさせたり、 自分の文化を振り返ったりさせる。	○ 意見交換会や発表会などの伝え合う 場の設定を工夫して、伝え合いの楽し さや喜び、充実感を味わわせる。また、 いろいろな見方・考え方に気付かせた り、単元全体を振り返らせたりして自 己の生き方への考えを深めさせる。
伝え合い方を 考えさせる工夫	○ 簡単な英語やジェスチャーなどの非 言語も含めた方法で伝えさせる。	○ 相互評価を通して、相手を意識した 伝え方や聞き方を考えさせる。

(2) 児童生徒の変容

授業実践において、人とのコミュニケーション活動を中心にすえた学習を設定した。児童生徒は
伝え合うことに対して強い意欲をもち、相手と積極的にコミュニケーションを図ろうとすることが
できた。それぞれの授業実践における児童生徒の変容について述べる。

ア 小学校（英語活動）において

ALT の言葉を一生懸命に聞き、自分の気持ちを何とかして伝えるために積極的にコミュニケ
ーションをとろうとする児童の姿が見られた。また、ALT を通して異文化に触れさせることに
より、異文化への気付きを深めさせるとともに、自国の文化を振り返らせることができた。さら
に、互いの文化を尊重することの大切さを感じ取らせたり、これまで児童が知らなかった事柄に
気付かせたりしたことは児童の世界観を広げさせることにもつながった。

イ 中学校において

相互評価を取り入れたことにより、相手を意識した伝え合いの大切さに気付き、よき話し手や
聞き手になろうと努力する生徒の様子が見られた。また、伝え合いを楽しいと感じたり、喜びや
充実感を味わったりする場を設定したことで、伝え合いたいという意欲を高めることができた。
そして、伝え合うことを通して、働くことや生き方についての見方・考え方を広げさせたり、深
めさせたりして、自己の生き方への考えを深めさせることができた。

4 今後の課題

- (1) コミュニケーションへの意欲や態度の客観的な評価方法
- (2) 伝え合う力をはぐくむための発達段階に応じた指導体制の整備や他教科・領域との連携も視野に
入れた指導の工夫

《参考文献》

- ・ 七條 正典 「“伝え合う力” と豊かな人間関係」 『中等教育資料』 平成17年12月号
ぎょうせい